

青蓮院について

東伏見邦英

山城を中心として大和・近江には多くの門跡寺院があるが、それらの中で、青蓮院しやうれんゐんは往時に比べて最も振はないものゝ一つであつて、その正しい讀方さへも忘れられて行く状態にある。併し古くはこの青蓮院は妙法院と梶井又は圓融房・梨本・梨下等と呼ばれた只今の大原の三寺院と共に天台の三門跡・山の三門跡と云はれて、比叡山延暦寺を中心とする天台宗山門派に於て延暦寺について最も重んぜられた寺であり、更にこの三院に曼殊院と毘沙門堂を加へた五つの門跡寺院が現在に於ても最も重きをなしてゐることは、これらの寺々の門主(即ち門跡寺院の住職)のみが古いおきてによつて天台座主に選ばれる資格を有するからであつて、自然この五ヶ寺の門主になることには相當むづかしい條件が今日でもつけられて

ゐるのである。今見るところうら淋しい青蓮院が現今尙さうした高い寺格を持つてゐるといふ事は全く青蓮院自身を持つ歴史によることであるから、何がさうした青蓮院の寺格を作り上げ又何がそれを維持したかを調べることは興味の深いことであり、又國史を貫く日本人の性格に觸れることを感ずるのであるが、今こゝにそれらの問題に立入る餘裕を持たない爲に、簡単に青蓮院の歴史を紹介するに止める。

最澄の定めた山家學生式等のおきてが尙遵奉されてゐたと思はれる平安朝の初期から中期へかけて、天台の僧侶は比叡山上に雲集して長年にわたつて止觀・遮那の兩業を修したのであるから、自然それらの僧侶の住居としての小さな僧坊が數多く作られてゐたであらう。叡山に

三千の僧坊ありと稱したのはこれをさすのであると思はれる。その中の一坊に青蓮坊といふのが東塔の南の谷にあつたといはれ、之が青蓮院の前身とせられてゐる。

平安朝も進むにつれて天台宗は興隆の一路をたどり、宗教的方面に於て次第に深く社會の各層に浸潤して殊に上流社會の日常生活に結ぶことが深くなつて行つたが、それは同時に政治上經濟上に延暦寺に甚大な權力を與へることになつて行つたのであつた。かゝる情勢にあつて貴族の子弟の入つて延暦寺の僧となるものが急激に増加したことは自然の勢であつて、その傾向は當初は下級の公卿の子弟より順次上層に及んで、所謂攝録の家から皇孫ついで皇子に至り、その住坊がやがて門跡寺院と呼ばれる特殊な形態を形作ることゝなつたのである。かくの如く天台宗に貴族の進出することは、皇室又は貴族に係の深い寺院の重なる僧職に貴族出身の僧侶を就かしめることより進んで、最澄以來最高の弟子に相承され來つた天台座主の職をも貴族出身僧侶の専有物たらしめるに至つたが、又この時代はかゝる情勢を進めしめるにふさ

はしい名僧が貴族出身僧侶中から輩出したのであつた。青蓮坊から門跡寺院としての青蓮院への飛躍はかゝる趨勢に於て實現したことであり、そこに行玄といふ僧侶が登場してくる。

行玄は藤原師實の子であつて、展觀した大手鑑の中に存する一葉の筆蹟によつてその人物を窺ひ知ることが出来る。師實は宇治の關白頼通の子、即ち道長の嫡孫である。行玄は第四十三代の天台座主寬慶及びこれ又門跡寺院であつたといはれる十樂院を住坊とした第四十六代天台座主忠尋の弟子となり、三昧流の台密を良祐に受け、三昧院・慈徳寺・無動寺・法性寺等の檢校・別當・座主等を経て第四十八代の天台座主となり、更に法成寺・法勝寺・寶莊嚴院・常壽院等の別當を兼ねた。鳥羽上皇の御歸依を受くること厚く、彼が座主在職中に上皇はしばしば叡山に御登りになり、殊に康治元年には、その前年御出家遊ばされてこの年の五月南都で登壇受戒(五日)遊ばされたばかりの法皇に、回心戒を山上で授け(十二日)奉る事があり、遂に天養元年に當時御年十一歳の法皇の

第七皇子が彼に入室せられることになつた。この皇子は十三歳で出家されて圓性と申された。

久安六年に、行玄は美福門院が法勝寺に於て金泥一切經を供養せられた時の賞及びその時に止雨法を修した賞として、山上の住坊を美福門院の御願として青蓮院と號せしめられる恩命を受け、同時に圓性は權大僧都に任ぜられ、法性寺の座主に補せられた。それから約二十年して嘉應二年圓性に親王宣下あり、名を覺快と改めしめられ、こゝにその住坊青蓮院は所謂宮門跡としての實を備へるに至つたのである。(寺傳によれば仁平三年十月鳥羽法皇の命によつて院の御所に準じて青蓮院を造營し青蓮院門跡と號せしめられたといふも、確實な資料を缺いてゐる。)かくして覺快法親王は間もなく第五十六代の天台座主に補せられた。法親王の天台座主に補せられることは之より前行玄の次に座主となつた堀河天皇の皇子梨下の最靈法親王に始まることであつて、覺快法親王は二人目にあたるのである。

この様にして青蓮院の地位は行玄・覺快法親王によつて築かれたのであるが、之を確立したのは覺快法親王の

弟子慈鎮和尚即ち慈圓である。慈圓は藤原忠通の子で、攝關家の分流する時の有名な兄弟の一人である。即ち近衛家の祖基實・九條家の祖兼實・松殿の基房と兄弟であり、當時より歌人として聞えてゐたのであるが、私共としては日本に於ける歴史哲學の祖ともいふべき愚管抄の著者たることによつて忘れ得ない人物である。慈圓は上下の尊信を厚く受け、天台座主に補せられること四度に及び、殊に後鳥羽上皇には天皇の御時から御信賴を受けること極めて深く、上皇の爲に諸寺及び水無瀬殿に於て熾盛光法・普賢延命法・一字金輪法・如法佛眼法・七佛藥師法・如法北斗法・法華法等の祕法を修したこと枚擧に暇ない程である。熾盛光法は熾盛光如來を中心とする曼荼羅を本尊として日月蝕・天變地異・風雨災害の時、又除災招福の爲等に修する祕法で、山門の四大法の一つとされ、専ら青蓮院の門主が之を修するものであつた。それ故に展觀せる吉水藏所藏の聖教類中にも熾盛光經の古寫本があり、その奥書によればこの修法の傳來に關して通例の説と異なるものを二つ記してゐることも本院に在ることによつて特に興味深きを覺ゆることであるし、

又本院の本堂が熾盛光佛を祀る熾盛光堂であることの濫觴が、元久元年十二月に大成就院即ち熾盛光堂を後鳥羽上皇の御願と爲して阿闍梨一口を置かれる事になり間もなく之が慈圓によつて吉水に造營せられたことに求められるが如きであることに、本院の台密に於ける特殊な性格と慈圓の天台僧としての業績の大きさが思はれるのである。上皇の御信頼の厚いこと、兼實及び兼實を通じて源頼朝と親密な關係にあつたこと、は、慈圓を國政の樞機に參與せしめる要因となつてゐたから、御討幕の思召の募るにつれて上皇から疎んぜられるに至つたことも自然の勢である。愚管抄はさうした立場に立つた慈圓が、長い佛道修行の生活を通じて天台教理の中から體得した慈圓獨特の道理の觀念を以て歴史を考察し、歴史への深い沈潜によつて歴史性を練磨されたその独自の境地に立つて、強い信念と深い思索を以て一貫して著した歴史である。

その慈圓の住んでゐた青蓮院の位置は現在の寺地とは少しく異なる様である。前記の如く青蓮院は叡山の上にあつたのであるが、その風土の上から一年を通じて山上

に住居する爲には相當の苦難を忍ばねばならず、貴族の子弟が之を厭ふたことは當然であるし、平安朝の中頃以來は叡山開創の頃とは著しく事情が違つて宮廷と延暦寺との關係が密接となつて、上級の僧職にあるものは宮廷及び貴族の第邸に出入することが繁くなり、又京都に建てられた朝廷及び貴族の多くの寺々の重職を兼任する者も多くなつて、山を下つて京都に在任する日數の多くなるにつれて里坊を營むことが必要となり、遂には平常は里坊に住んでゐて事ある時に登山する事となつて行つた。慈圓の時代は既にかうした状態にある。この事は高山に祀られた神社が、一年を通じて奉祀する事の困難によつて、信仰の増大につれて却つて山麓の人里近い處に壯大な規模を以て里宮が營まれ行事の大半がこゝで行はれること、相通する現象であると思はれる。従つて里坊の位置は叡山の麓と京都との中間、若しくは京都の特に用事多き場所に營まれることが普通であつた。青蓮院も亦かゝる情勢の中にあるのであつて、その里坊は多い時には白河・吉水・三條・姉小路の四坊を有したと傳へられてゐる。白河坊は今日その位置を知り得ないが岡崎よ

り白川へかけての地帯の中にあり、六勝寺の檢校・座主・別當等を兼務する必要によつて營まれたものと見られるべく、吉水坊は今日の知恩院の位置にあたり、元久元年十一月慈圓によつて勸められたもの、如くであつて、之は前記大成就院及びその頃から承元元年にかけて三條白川に後鳥羽上皇の御爲に建てられた最勝四天王院に關聯あるもの、如くである。三條坊は現在の寺地であるとする寺傳があるが、三條坊と現寺地とは必ずしも一致するものではなかつた様に思はれ、現在の寺地の西方後に尊勝院の移された附近をさすのではないかと思ふ。

姉小路坊は維新前には寺領として殘存してゐた様である。現在の寺地は前記忠尋の開創にかゝる十樂院なる門跡寺院を繼承したものである。青蓮院門跡歴代中には最守・道玄・慈道法親王・入道行圓親王・道灑法親王・入道尊圓親王・入道尊道親王の如く十樂院を兼任するものが多く、その間に山上の青蓮院は焼亡し(建久五年九月)南谷勝地房跡に新に造營せられることもあつたが、吉水坊は焼失し、三條・白河の坊も顛倒するに及んで、十樂院を青蓮院にあはせて之を本坊とするに至つた様で

ある。その合併の完全に行はれたのは尊道親王の時の如くであるが、既にそれ以前の歴代門主の十樂院を住坊とするものが多かつたのである。尙青蓮院に從屬したものに大乘院と妙香院があり、大乘院は比叡山上にあつて青蓮院門主の天台座主として登山の際に用ひられることが多かつた。豊臣秀吉が叡山から本院の西北へ移した尊勝院も爾來子院の一つとしてあり、慶長寛文の頃之に住したところのある慈性上人の日記については嘗て西田教授の歴史地理第三十卷第二號に紹介せられたことがある。

慈圓以後に於て最も名を知られた門主は入道尊圓親王である。尊圓親王は伏見天皇の皇子、即ち後伏見天皇・花園天皇の御兄弟であるから、書をよくされたことは當然のことである上に、世尊寺流の書道を受けて新に獨特の書風即ち青蓮院流とも御家流とも云はれて江戸時代には公文書に用ひられて廣く日本中に弘まつた書風を大成された。それ以來青蓮院門主は歴代書を能くし、天皇を始め公卿武家に入木道の傳授をすることが長く続き、その方面に關する資料は甚だ多く當院に傳存すべきであるが、維新後寺運殆ど衰滅に歸した際にこの方面のものが

最も多く散佚したと推定されるだけあつて、展観した文
明元年感得の旨の奥書のある夜鶴庭訓抄の鎌倉時代古寫
本以外には、年代の古い特に優れたものを見出し得ない
状態である。

尊圓親王は恰も後醍醐天皇・後村上天皇の御代にあたり、持明院統の御出であつたから、武家方の勢力が京都を支配する時には天台座主に補せられ、宮方の勢力が之に代つた時期には座主を罷められるといふ關係に置かれた。かゝる情勢の中にあつて、花園法皇は後深草天皇以來の持明院統の御陵たる深草法華堂を御陵と定められな
いで、青蓮院の現寺地の西、江戸時代に知恩院に門跡を置かれるやその住坊の地となり、明治以來得淨明院となつた地に、法華堂に擬して花園寺を營み給ひつゝあつたが、その完成に先立ち正平三年十一月俄に萩原殿に於て崩御遊ばされた爲に、十樂院の上の山即ち現在の寺地に接した勝地に山作所を構へて葬り奉つたことは、當時の文獻が直接尊圓親王との關係を記さないとはいへ、法皇と親王との御兄弟の親密な御關係なくしては考へられないことである。親王またこの十樂院に住し、こゝに薨せ

られたのである。

尊圓親王はその當時から能書を以て聞え、今日に於ては書道の上でのみ知られてゐる傾きがあるが、門弟數人と共に主として編纂された門葉記百二十九卷（その後増補されて百八十四卷）によつて考へれば、親王の時は青蓮院の歴史に對する深い反省のきてゐることを覺えるのであつて、これによつて青蓮院の門主として天台宗に盡された御精神を知ることが出来ると共に、又親王の住まれた時代が歴史の反省をうながさずには置かなかつたことが考へられるのである。尊圓親王御自筆の門葉記は一部分散佚してゐる様であるが、尙本院の祕藏するものであり、御自筆のものと増補のものとをあはせてその編述の場所たる本院に於て展観し得たことを特に意義深く思ふのである。

室町時代に入つて足利義滿がその子を二人まで青蓮院に送つたことはこの時代の武家との關係を物語るものとして注意すべく、殊にその一人義圓准后が第百五十三代の天台座主となり、後遺俗して將軍義教となつたことには興味をそゝられるものがある。

室町時代の末から江戸時代の末にかけては全く所謂宮門跡となつた。その間にあつて將軍家光の時に輪王寺門跡が新に作られ、之が天台宗を統攝することになつてからは天台座主は有名無實なものとなり、信長の焼打後秀吉・家康によつて再興の運に會した延曆寺も昔日の威容を回復することは出来ず、青蓮院その他の京洛の門跡寺院亦その體面を維持するに止まつたのであつたが、輪王寺の初代門跡となつた入道尊敬親王(後に守澄と改めらる)が青蓮院の尊純親王に入室して修業の上關東に下られたことによつて、當時の青蓮院の地位を推察することが出来るのである。

最後の親王門主は入道尊融親王である。尊融親王は伏見宮邦家親王の子で始め成憲親王といひ、天保九年興福寺の子院一乘院に入り、出家して名を尊應と改めしめられ、一乘院門主となり、天保十三年興福寺別當に補せられてゐたのであるが、その後間もなく青蓮院・輪王寺等の親王門主の薨去に伴つて天台諸門跡寺院間に門主の移轉が度々行はれた結果、勅によつて嘉永五年二十九歳で青蓮院に轉じて來たのである。特に南都から迎へられた

のはその母が青蓮院の坊官鳥居小路氏の女であつたからであると思はれる。展觀した孝明天皇御宸筆の「尊融」なる名記は、尊應といふ名が青蓮院に嘉吉から永正へかけて門主として住した二條持基の子の尊應と重複するので、移轉と同時に改名せしめられた時に賜はつたものである。尊融親王は移轉後數ヶ月で第二百二十八代の天台座主となり、これより漸次孝明天皇の御信任を厚く受ける身となつた。時恰も幕末時運急の時であり、親王は京都に集つた勤王の志士の囑目するところとなつて、その日常起居した叢華殿にこれらの士の參集することも繁くなつたのであつたが、大老井伊直弼の所謂安政の大獄は一橋慶喜・水戸齊昭等を主として志士等の彈壓より進んで朝臣に及んで、安政六年幕府の内奏によつて尊融親王は天台座主を罷められ相國寺内の一院に幽閉せられた。文久二年赦されて青蓮院に戻つたが、翌年勅によつて還俗してその住宅の地によつて中川宮と云ひ、しばらくして朝彦の名を賜はり、文久三年の政變には殊に關係すること深かつた。その後賀陽宮と改稱せしめられ、國事に參劃すること深くあつたが、文久三年の政變によつて岩

倉具視及び長州藩の怨むところとなつたから、維新後忽ち廣島に流謫され、明治三年に至り漸く赦されて京都に歸り、明治八年新に久邇宮の稱號を賜はつた。

尊臨親王は前記叢華殿を甚だ愛し、廣島より歸還後現京都御所御苑内の下立賣に邸を賜はつてからはその中に之を移建し、その薨後賀陽宮邸が三十三間堂の東に移る時に又その邸内に移され、大正二年現在の所に移築されたのであつて、こゝに展觀の場として使用するその二階は即ち親王が志士と常々會された部屋である。その舊位置は現在の寺の北境の築地の外、少し北東にあたる台地にあたり、三條以北の京都市街を見下す景勝の地であつて、嘉永七年皇居炎上の際に尊臨親王が最も早く参内したと傳へられることの然るべきを理解せられるであらう。叢華殿に近く東山の山林中を通つてこゝから出入したといふことである。

尚十樂院・吉水坊等を合せた江戸時代の始めまでの青蓮院の境域は、南は祇園社に隣し、現在則山公園と知恩院との境界にある門は青蓮院の南門としてあり、それよ

り東は將軍塚までの山地を含み、北は岡崎の邊に及び、西の方は明瞭でないが今日の寺地の西を限る道路より遙かに西にのびて、そこに坊官等の屋敷・尊勝院等の子院があつた。法然上人の吉水の坊はこの境域の中に在り、慈圓の情によつて安住の地となつてゐたが、慈圓の法然に對する態度が冷淡なものであつたことは愚管抄によつて想像し得るところである。この關係は又青蓮院と知恩院との關係を長く規定したことであつて、文祿四年の頃になつても知恩院の住職は青蓮院宮の令旨によつて定められる形をとつてゐた。然るに江戸時代に入ると、徳川氏が元來淨土宗を奉じてゐたから、その本山たる知恩院は大いに擴張されて青蓮院は境域の大半を割くことゝなつた。それは大體に於て里坊たる吉水坊の舊地であつて、之によつて慈圓が貸した庇が江戸時代に主屋をとる形を呈したのである。

寺寶には御宸翰・佛畫等に注意すべきものが少なくないが、平安朝以來の莫大な數量に上る聖教類が傳承され來つたことに本院の特色がある。その中で特に名高いものは二九一の箱と稱するものである。之は皇慶・良祐の

台密三昧流の秘奥を傳へるもので、後鳥羽天皇の時に勅封を加へられたこともあり、歴代の門主も容易には見ることの出来ない秘密の箱たることによつて世に知られてゐるものである。今回特に史學研究會の爲に之を開かれるにあつて内容を一見するに、尊圓親王が今回展觀した優婉なる筆蹟ことのほか優れた二九一箱目錄を作製せられる以前に、散佚したものとあることを思はせるが、それ故にこそ勅封を加へて嚴重に保護せしめられる必要があつたのであつて、皇慶以來一千年に近い年月を三昧流の秘法と共に師資相承されて今日に至つた嚴肅な事實は、國史の奥に存するものに對して新なる反省と感謝を捧げしめずには置かないのである。

二九一の箱以外の聖教類の中では、平安朝の中頃から室町時代の終り頃までの間のあらゆる時期に筆寫され且傳承され來つたところの、紛失し易い一葉の紙片・方五寸に満たない小冊子より數卷に及ぶ經典等の千三百數十點に上る老大な聖教群の存在することが世に著聞してゐる。これは古くから一括されて吉水藏と呼ばれる土藏に秘藏され、自然吉水藏の聖教として知られてゐるもの

である。その内容から考へる時は主として三昧流台密に關するものであつて、二九一の箱の外延を構成するものであり、三昧流の法脈と共に傳へられ來つたものゝ様である。併しの中には註涅槃經の奈良朝寫本が一卷天平のまゝの姿で存することや類例の少ない平安朝初期の寫經として勝鬘經一卷を含むこと、又智證大師圓珍關係のものも少なからずあることも注意すべきであらう。註涅槃經は、本院に別に藏せられて既に國寶に指定されて今回も展觀した涅槃經集解の一卷と、同じ寫本の別の巻であつて、吉水藏に入れられてゐた爲にこの方が保存状態が優れてゐる。智證大師關係の代表的ものには展觀した六種曼荼羅略釋であつて、圓珍が唐の法全から傳へたものとして園城寺に秘藏せられ來つた五部心觀の註釋である。この本はその奥書によれば三昧流台密の祖たる良祐が園城寺の唐院本即ち智證大師の廟に附屬する本を傳寫し、葉子本によつて梵字を寫し、三校までしたものを、良祐の寂後長承元年十二月二十六日に雅祐といふ僧侶が書寫した本であつて、更に後に青蓮院の門主となつた道玄が朱書で建長八年九月に之を傳領した旨を記して居

り、慈覺・智證兩門徒の争として長く國史を彩つた出來事に對して、天台教學の傳承の上から尙考察すべきものがあることが考へられる。尙又展觀した無題抄なる一小冊子は慈圓の著かとも考へられ、その中の安徳天皇御入水の際に於ける神璽に關する詳密な記事は、國民の等しく喜びとするところのものである。

さて吉水藏の聖教はその殆ど全部に傳承によつて次々と加へられた奥書を有することに特に尊さが感ぜられる。展觀に出なかつたものではあるが、良祐・圓性・入道道覺親王・道玄・慈道法親王・入道尊圓親王等の三昧流の祖或は青蓮院の門主となつた人々がこれらの聖教を傳承する時に奥書を加へたものゝ中から二三の例をあげて、全貌を推知する援としたい。

建曆二年頃の寫しの胎藏界義軌下の奥書

建曆二年五月六日勘付科文了 (花押あり)

校本訛記了

延久六年六月七八十一二四箇日之間於南泉房奉受了

永保二年正月七日於同室奉受布字八印了

青蓮院について(東伏見)

良祐

寛喜二年八月十九日於誠照寺隣室□寶房奉受了

尊眞

文和三年六月五日以三昧御筆本白虎納校合了

遍照金剛尊圓親王

鎌倉時代の寫しとされてゐる巽六軸中の請決の奥書

金剛佛子道覺記

(朱) 少智金剛道玄傳治之 先世宿因令喜者也

(墨) 嘉元二年十月日傳領畢 遍照金剛慈道

稟數代之正嫡傳一流之祕書宿因之至感淚

難禁者也

永保元年の寫しの不動立印儀軌の奥書

永保元年十月八日爲求法者書之了

(朱) 永保二年五月廿九日以井房根本々點了

勝蒙

(朱) 同三年三月廿八日於谷房奉讀了

勝蒙

一交畢

永久四年七月十一日奉隨三昧阿闍梨傳受了

良質

元永元年五月十八日以圓陽房本粗移點了

建保二年十月十五日隨大乘院僧正奉受了

道覺

大治二年七月廿三日於二條房從圓陽房重傳受了

傳受了

圓性

建長五年十月九日奉隨背蓮院僧正御房重奉受了

金剛佛子 道玄

これらの奥書を記した人々及び奥書を加へずに傳領した無數の人々の傳受の態度やそれらの人々がこの聖教を火災その他の難から守つて傳へてきた努力を追念し、且現にそれらの人々が嘗て活躍した寺に於てそれを見る事は、私共にとつてそれは單なる死せる資料の集積ではなくて、一々の奥書が生々として互に脈絡を持つてこの現在の隣間に至つてゐることを感ぜしめずには置かないのであつて、こゝに生きた歴史の少なくとも一つの面が眼前に展開してゐることを思ふのである。同じ文字を活字に移したものに對して暗夜に廢墟に立つた様な感じを受けるとしても、この同一の紙片に年代を異にして書き繼が

れた肉筆の跡に見入る時には始めて生きた歴史の身に迫り來ることを覺えるであらう。

吉水藏の聖教は大正八年高楠順次郎博士等によつて調査されて、奥書も寫しとつた合計三冊の目録が作成せられてゐて、その目録には梵字を含むものについては専門の立場から批判が加へられてあつて難有なものであるが、歴史の方面からの調査ではなかつた爲に私共として遺憾に思はれる點が少なくない。前掲の諸奥書もその目録から寫したものであつて、歴史家としてはこれでは頼りない思ひを抱かざるを得ない。紙質・體裁・裝飾の有無・紙背文書等の調査と共に奥書をその筆蹟の同異等を明らかに註して完全に寫しとつた目録の作製されることを將來に期待すると同時に、平安・鎌倉・室町を包括する聖教類がかくも無數に一個所にまとめて傳へられてゐるところは他にない事であるし、又それが直接背蓮院の歴史の貴さの一面を如實に物語るものなのであるから、散佚火災雨漏等の厄にあふことなく、嘗て傳へられ來つたが如くに三昧流の法脈と共に千年の後に傳承せられ行かんことを冀ふものである。